


<p>福島大学附属図書館報</p> <p>書 燈</p>		<p>No.22</p> <p>1999. 4. 1 発行</p> <p>〒960-1293 福島市松川町浅川字直道2 TEL (024) 548-8083 http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/</p> <p>福島大学附属図書館</p>
-------------------------------------	--	---

図書館と講義とレポートと

教育学部 黒 沢 高 秀

私の講義ではしばしば福島大学の図書館や教育学部の情報教育演習室を利用します。情報の収集や活用能力が、大学に入った後のその人の可能性に大きく影響すると考えているからです。情報には信頼性、独自性、新しさなどの質があります。得られた情報の質を判断すること、そして質の良い情報を効率よく集めることは、直面している問題を解決するカギになります。

初等理科教育法という講義では、情報の収集力と得られた情報の質の判断力をつけるために、図鑑の使い方を勉強します。図鑑にも、専門家が新しい知見などを盛り込んで多大な労力をつぎ込んで作り上げたものから、あまり専門的でない人が他に出版されている図鑑の文をつなぎ合わせて作ったようなものまで、いろいろとあります。良い図鑑かそうでない図鑑か（つまりその図鑑が質の良い情報を提供してくれるかどうか）を見抜くのも、図鑑の使い方の一部です。教員になったら、子どものためにも出版文化のためにも、学校の図書室に良い図鑑を多少値段が張ってもそろえるようにしてほしい、ということを経験の中で話します。子どもに専門的な本を与えるのは無駄であるとか、もったいないとかいう考えの間違いを今更ここで指摘するまでもないでしょう。

理科概論と共通教育の講義では、情報の収集力と活用能力をつけるために、試験レポートをしばしば課します。図書館などで文献を調べて、講義で教えた内容の一部を講義より詳しくまとめるという課題です（この文章を読んでいる方の中にも、私のレポートを書いた人が何人もいることと思います）。この課題を始めた昨年は、集まったレポートを見てとてもショックを受けました。大半の人は文献を丸写し、一字一句全く変えずにひたすらタイピストに徹したレポートもかなりありました。大半が丸写しの2教科300本のレポートを読むのは大変な苦痛でし

た。社会に出て、例えば会社や役所で、ある問題についてレポートをまとめるように指示された時、他の文献や報告書を丸写しただけのレポートを提出したら、その人の社会的地位は危うくなります。なぜこんなことをするのでしょう。丸写しのレポートを書いた学生達を呼び出して、理由を聞いたところ、私は大きな誤算をしていたことがわかりました。多くの学生にとって、これまでレポートといえば「感想レポート」ばかりであって、何かのテーマについて情報を収集し、それをまとめるレポートは経験がないということでした。そのため、参照や引用とはどういうことか、丸写しとはどこが違うのか、文献を参照や引用してレポートを書くとはいったいどういうことかがわからなかった、ということでした。悪気はなただけ知らないだけだった、ということですから。これをうけて今年は、レポートの章立てその他を厳密に指定した上で、一時限を割いてレポートの書き方をみっちり講義しました。その甲斐あってか、丸写しのレポートはほとんどなく、大半が満足いくレベルのレポートでした（ただし、提出されたレポートの数は激減しましたが）。その他、教養演習でも図書館を利用させていただいています。

大学入試までは一律の教科書（つまり情報源）が既に用意されており、皆が同じことを覚えることを競います。そして、多く正確に覚えた人が優秀とされました。大学に入った後は、一律の教科書がない問題、人によって別々の問題について取り組むことが多くなります。卒業論文しかり、社会に出てからのレポートや報告書作成もしかりです。そうすると、覚えることよりも、資料を収集したり活用したりする力が大切になります。こういった意味で、大学時代は今まで行ってきた「勉強」の概念を大きく変える重要な時期だと思っています。

ジャン・ボダン『国家論』(1579年、リヨン)[その2] 展示資料解説

経済学部 岩本吉弘

前回、タイトル・ページのヴィネットについて書いた。今回は、そこからさらに本を開き、序文と目次を過ぎた本文第1ページ目の写真を載せてもらった。なぜかと言うと、この本はなかなか面白い本で、実はこのページを境に一変しているからである。もちろん文章の内容のことではない。印刷技術のことである。この写真を見ながら、書誌学上大切な「版 edition」というものに触れてみたい。

19世紀以降「ステレオタイプ」印刷というものが出る前は、組んだ活字をそのまま長く保存することなどできなかった。また活字自体貴重だったので、印刷の終わった組版はすぐ解体して後のページ分を組み替えることも普通におこなわれた。たとえ同じ著者の同じ出版者の同じ本でも、新たに活字版が組み直されて印刷されたものは書誌学上は別の本なのである。この各版がどういう関係にあるかを確定するのは、書誌学者や図書館員の重要な仕事になる。このボダンの書の場合はどうなのだろうか。

本学所蔵版には、タイトル・ページに「Reueuë, corrigée & augmentée de nouveau.」という一行がある。そのまま訳せば「新たに見直され、訂正され、増補された」ということ、つまりこの本には先行する版があって、その改訂増補新版だという意味だ。新旧両教派の武力紛争、国内分裂のさなかであって、統一国家のあり方を論じたこの書は、当時のベストセラーの一つとなる。前回書いたデュピュイが1576年に「印刷特認」を得て(フランスでは1521年以降、ルターを始めとするプロテスタント派の著作の禁圧を主たる狙いに、パリ大学神学部による事前検閲と許可を受けた著作と業者しか出版ができない制度になっていた)、パリで初版を出して以降、毎年のように版が重ねられた。本学所蔵版と版型の同じフォリオ版(2つ折り版)に限り、また明らかな海賊版は除くと、その後、同じパリで77年(これには少なくとも2種のヴァリエーションがある)、78年と再版され、その78年の版で改訂が加わり、本学所蔵版と同じ「Reueuë...」の記載がされ、「第3版」と明記された。さらにデュピュイは翌79年に「第4版」と明記したオクターボ版(8つ折り版)を出版する。そしてその同じ年に遠く離れたリヨンで現れるのが、この本学所蔵版だということになる。ここまで見てくると、この版は、パリの業者であるデュピュイが、自らの第4版にあたるものをリヨンで出版したもの、ということになりそうである。

だがこの版の現物を見ると、どうもおかしなところがある。そこで写真にあげたページが意味を持つ。このページから前と後の部分とは、一見して紙も活字フォントも別のもので、少なくとも同時に印刷されたも

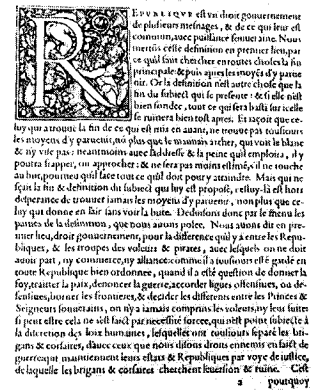
のとは思われないのである。

その理由は、この版の成立には、タイトル・ページには現れないある人物が関わっているからであろう。それは、この本の最終ページのコロフォンの「ジャン・ド・トゥルヌ印刷所 1579年」という記載に出てくる。

ジャン・ド・トゥルヌ印刷所。ロ

ベール・グランジョンという天才的な活字デザイナーを抱え、16世紀における印刷史上の傑作と呼ばれる作品を次々生み出した業者だった(トゥルヌ家については数年前に大佛次郎賞を受けた宮下志朗『本の都市リヨン』に詳しい)。本学所蔵版はデュピュイの出版物としてタイトルページが付けられているが、少なくとも本文部分はそのトゥルヌ(当時はII世)の印刷によるものである。加えて興味深いことは、例えばカルチエのトゥルヌ書誌などを見ると、実はトゥルヌは同年、この自分の印刷した同じ本文部分に、デュピュイのものとは別に、自分自身のタイトルページを付したものを出版しているということ、また翌年にはデュピュイのタイトルページの付いた80年リヨン版というのが出ているが、これも実は本文部分は、この前年のトゥルヌの印刷物だということである。つまり同一の本文印刷に対して、3つの異なるタイトルページの付いたものが存在するということになる。

売れ残りのシートに新しいタイトルページや補遺を付けて、あたかも新本のように仕立て直すということは珍しいことではなく、それは書誌学上は「版」という用語ではなく「issue再版」という用語で区別される。まあそれはいい。デュピュイは、自分の各版に明記しているように、このボダンの書について、自分以外の「他のあらゆる出版・印刷業者に本書を印刷することを禁じる」という10年間の特認を持っており、カルチエは、トゥルヌとの関係について、2人が「版を分け合った」と書いている。だがどうも気にかかるのは、この本学の所蔵する79年デュピュイ版の、タイトルページ・前付け部分と、トゥルヌの名のある本文部分との印刷上の強い落差である。これはどうしたこと



か、80年版を見ても感じられない。両者の関係は、例えばデュピュイが印刷を委託したといった平和的な契約関係だったのだろうか。

ここからは手元に資料もないままのまったく私の想像で、どなたかに教えを請いたいところであるが、もしかするとトゥルヌは、最初から違法を承知で自分の版を出版し（例えばフランス国内よりもプロテスタント圏への輸出用にでも）、その後それを察知したデュピュイがトゥルヌに対してこの版の所有権を主張し、とりあえず79年販売分については、別に印刷した自分のタイトルページを付けるよう強制した、実はこの版の背後には、そういう“事件”でもあったのではないかと、そういう想像に駆り立てられるのである。これは、この79年版の前付け部分はトゥルヌの印刷ではないのではないかという印象と、事実別にトゥルヌ自身の出版分が存在するというところからの想像にすぎない。トゥルヌ家の記録や使用活字の研究から明らかにしうること、またすでに明らかになっているのかもしれない。だが、新旧両派の衝突ではなくその政治的調停と平和

を求めたボダンの書の性格、当時「隠れプロテスタント」だったというトゥルヌや当時のリヨン市の位置などを考えつつ、そういう想像をしてみるのも楽しい。

いずれにせよ、このリヨン版は、ボダンのテキスト研究というよりも、むしろ、西洋印刷史上の巨星の一つであるトゥルヌ家晩期の印刷物としての価値が高いと思われる。この書を開いていき、写真のページに入ると、同じオールド・スタイルのローマン体活字でも、それがはるかに美しく、鮮明さとやわらかさを調和させていることは誰でも感じざるえないだろう。また4人の天使をあしらったモノグラム（文頭の飾り文字）や、気品のあるフラワー・ボーダー（花罫）などは、16世紀の芸術作品としても価値を持つ。新旧両派の血なまぐさい内戦の中で、この版の印刷された1579年のリヨンの出版界はもはや落日の中にあり、トゥルヌ家自身、プロテスタント迫害の嵐によって、わずか6年後には故国を捨てジュネーブへの亡命を強いられる。この本学所蔵版に漂っているのは、ルネッサンス期の印刷美術の最後の香気のようなものである。

思い出の一冊

思い出の一冊

行政社会学部 雨 森 勇

あの“安保闘争”を迎える60年前後の政治の季節の中で、私は殆ど政治的でもなく、さりとしてまったくのノンポリというのでもなく、中途半端な文学かぶれの青少年期を過ごした。翻訳物中心に読み漁り読みかじった断片を口いっぱい頬張り、同人誌仲間が集う茶店（サテン）に毎日のように出かけては相手かまわずやぶれかぶれに吐き出した。たとえば、活気に充ちた情景にも見えるが、そこはやはり大学でもネクラの部分の請け負う若者としてのたしなみと誇りを絶えず自覚する場面でもあった。

つまりは、鼻持ちならぬガキの一人だったわけだが、その読書遍歴はわりとまっとうに辿られたのではないかと。なぜなら、私もその頃の世代によくあるように、それこそヘルマン・ヘッセを通して海外文学やら哲学に足を踏み入れ、ヘミングウェイ、カミュ、カフカ、ドストエフスキー、サルトル、ニーチェ、ハイデgger、ヘンリー・ミラーなどなど、殆ど一貫性のない乱読へと誘われたからである。

そこで思い出の一冊となれば、やはり少年期も盛りの高校1年の夏休み、ふと手にしたヘルマン・ヘッセの『青春彷徨』（岩波文庫）をあげるしかない。出会いとは正しくこういう瞬間を指すのかと思えるほどに、私はこの1冊に魂を抜かれたのである。中学時代で日本文学は卒業したと勝手に思い上がっていたふしもあるが、翻訳物独特の重層的な文体、形容詞・副詞が華麗に連なり、間接詞がとどまることを知らない文章の、それまで味わったことのないコクというやつにすっかり殺（や）られたとっていい。

翻訳物に慣れたいまの人たちには、この驚きは分からないだろうと思う。ましてや田園風景の刻明な描写でこれでもかと迫るヘッセときたら！間を置かず放課後ともなれば武蔵野をさまよ

い歩く少年となった私であるが、やたら美文調の文章を書くようにもなり、それが一度ならず学校新聞の一隅を飾ることにもなって、小説家になりたいなどと他愛もなく憧れた。受験にも失敗し、長ずる前に夢は消えてもお、田園をさまよう癖だけは残り、この福島にきてなにか一番うれしかつていけば、雪を覆った美しい山々を見ながらあてもなく歩けることだと明言できる。



思い出の一冊

モスクワ図書館事情——1998年の体験から

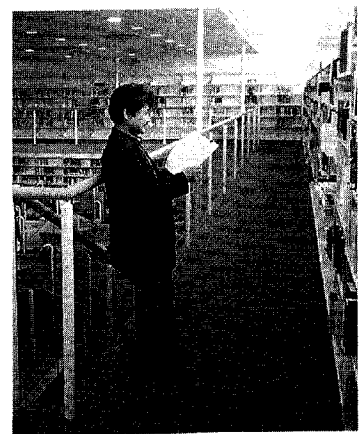
行政社会学部 小島 定

私がモスクワ滞在中に利用した主な図書館には、それぞれタイプを異にする3つのものがありました。それを報告して「書燈」編集部への責めを塞ぎたいと思います。一つは「レーニン図書館」で、言うまでもなくロシア最大の有名な図書館です。ロシアの今の「ご時世」にあわせて、「レーニン」という名前を削り「ロシア国立図書館」と名前を変えましたが、「通の」間では今でも「レーニンカ」という愛称で呼ばれています。ここにはすべての分野の蔵書が完璧にそろっていて、学生から学者までいつも人で混み合っていますし、ずらりと並んだ図書カードをひくために、あっちへ行ったりこっちへ来たりと、私などには「運動不足」の解消になるくらい大きな図書館です。「レーニンカ」が総合図書館なら、もう一つの「イニオン」(正式名称は「ロシア科学アカデミー社会科学情報研究所」)は、さしずめ社会科学系の研究用専門図書館といったところです。こちらの方は、革命前後の蔵書もそろっていて、社会科学系の研究者ならたいの人が利用してきた図書館で、これまでも私はここを主な仕事場にしてきました。

この二つとも国立の図書館で、ソ連時代にあった「スペツ・フォンド」という名の「閲覧制限」措置はなくなり、すべて蔵書がフリーに利用できるようにはなりましたが、利用システムは昔のまま、借出と返却には手間もかかるし、管理はすこぶる厳格で、レーニン図書館では今でも出口に「警官」が立っていて、持ち物検査しています。図書館に警官とは、初めての人は決まって「やっぱりロシアか」と反応すること請け合いです。図書館の蔵書は今でも立派な「国家的文化財産」というわけです。ところが、いまは国家財政がピンチでここに下りる予算は雀の涙で、特にイニオンでは、新刊書と洋書が入らなくなりました。イニオンの所長は「蔵書を調べた後世の人々は90年代のロシアには文化がなかったと言うかもしれない」と絶望的な声を上げる始末です。ここでは10月末になっても暖房が入らず、私などは分厚いコートを身に纏い、例の毛皮の帽子をかぶって本を読んでいたというような状態です。

ところが、私が利用した3つめの図書館は、旧来のロシア式図書館のイメージを完全に覆すもので(しかし、はじめてモスクワを訪れた欧米人には母国で見慣れたもので、珍しくもなんともないでし

うが)、長年ロシアの図書館に「馴染んできた」者にとっては、これはちょっとした驚きです。92年のいわゆる体制転換後、私立や半官半民の大学が続々と新設されましたが、私が利用したのは、そのような大学の一つ、「モスコフスカヤ・シコーラ」という社会学、法学、経済学系の大学のもので、この大学はイギリスのマンチェスター大学とロシア国民経済アカデミーとのいわば「合弁」で設立された大学院大学で、そろえたスタッフからみても、凡百の「駅弁大学」とは明らかに違って、しっかりとした大学です。図書館に入ると、開架式でかつオープンな明るい閲覧室がいっばいに広がり、その真ん中にコンピュータをずらりとならべています。図書検索はもちろんインターネットも自由に利用できます。さらに、出口でのチェックの役目は、特別な「センサー」が行ないます。新設ですから、蔵書は多くありませんが、ここの自慢は欧米の定期刊行物がそろっていることです。こうしたタイプの図書館が登場したことは、従来のロシアの図書館事情からみれば、たしかに革新的な動きです。しかし、すぐっておかねばなりません。ここの運営資金は例のヘッジ・ファンドの大立て者ジョージ・ソーロスの「文化財団」でまかなわれているということです。もとより、資金の出所はどうであれ、この新タイプの図書館が、一つの新しいロシアの学問文化を育てている事実を、私は決して否定するものではありません。しかし、他人の、しかも「あぶく銭」に依存するばかりでいいわけではないだろうし、これまでともかく自前で蓄積してきた、たとえばあのイニオンの貴重な「学問的遺産」を荒れるままに任せておいていいということには決してなりません。「本物の」学問文化の営みというのは、人間の社会的営為の中でも、「断絶」や「飛躍」というのが一番困難な分野の一つではないかと思うからです。私の垣間見たモスクワ図書館事情からそんな事を思いました。私のちょっとした感想です。(1999・2・28記)

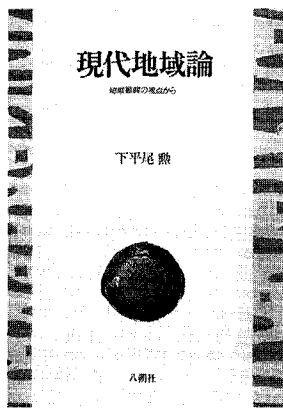


「モスコフスカヤ・シコーラ」新タイプ図書館にて

学内教官著作寄贈図書を紹介

『現代地域論』 東京 八朔社 1998.8

下平尾 勲著 (経済学部教授)



バブル経済崩壊後、不況は深刻化し、日本経済はもとより地域経済も急激に変化しており、地域の立場から地域に関する重要問題について発言しておきたいと考え、最近発表した論文をとりまとめた。

その場合2つの問題意識があった。第1は、長期不況下での海外への資本流出と国内の産業合理化の中

で、日本経済の再建を図るには、資本、技術、労働力を活用し、地方産業の発展と再生産が鍵であるということ、第2に、わが国の経済成長期には、地域と大都市との再生産、相互依存関係が存在していた。しかし自由化の下で地域をささえていた主要な産業の衰微とともに、地域における若年労働力の再生産力も低下し、地域の主体性確立が課題となった。

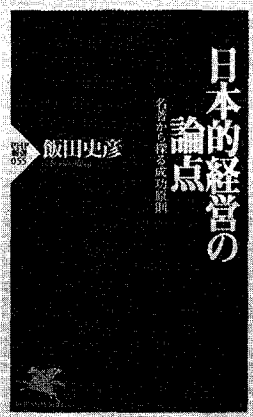
このような問題意識の下で時代の変化をたて軸に、グローバルな視点を横軸に新しい地域を創造したいという気持ちをこめて、地域の現状をふまえながら地域産業政策、基盤整備や地域連携のあり方、行政の政策課題などについて論じたのである。

(請求番号601.1 / Sh51g 学内刊行物コーナー)

『日本的経営の論点～名著から探る成功原則』

東京 PHP新書 1998.10

飯田 史彦著 (経済学部助教授)



日本企業に独自の経営スタイルとは何であり、いかなる評価を受け、どのような諸問題に直面しているのだろうか。本書は、本学経済学部の飯田助教授が、内外の150冊にのぼる「日本的経営」の研究書を分析しながら、このようなテーマを追求したものである。本書では、まず日本的経営論

の系譜を概観し、従来の研究書で日本企業の特徴だとみなされていた特徴を整理する。次に、最大の特徴とされる「終身雇用」と「年功制」の真偽を論じたうえで、その根底にある「集団主義と愛社精神」や、「日本文化が企業経営に与える影響」に関する様々な論点について考察する。そして、著書全体を通じた考察をもとに、現在の日本企業に潜む問題点を指摘し、今後進むべき方向性を提示している。

すでに『日経ビジネス』などの誌上において、日本企業の過去・現在・未来をひもとくために最適なテキストとして広く紹介されているが、学生諸君にも一読をお薦めしたい。

(請求番号335.21 / I26n 学内刊行物コーナー)

『権力装置としてのスポーツ 帝国日本の国家戦略』

東京 講談社選書メチエ 1998.8

坂上 康博著 (行政社会学部助教授)



「スポーツ狂時代」。戦前の日本にそんな時代があった。大正末から昭和初期のことである。

人気の中心は、神宮の東京6大学野球や甲子園大会、大相撲であり、ラジオの実況中継に人々は釘づけとなり、ロス五輪、ベルリン五輪での日本選手の活

躍は日本列島をゆさぶるほどの熱狂を生み出した。

そして、こうした状況を見据えながら、国家によるスポーツの利用も進められていく。一見“自由の王国”にみえるスポーツは、こうして人びとの意思と国家の意思とがぶつかりあう“格闘場”となり、そこでの格闘や葛藤のなかに人びとの自由のありようと彼/彼女らが背負っているさまざまな困難が映し出されることになるのである。

それを描き出すこと、これが本書の中心テーマであり、ぼく自身それに向かって全力を尽くしたつもりだが、さて、その出来ばえは??? 率直な意見や批判をいただければ幸いです。

(請求番号780.2 / Sa38k 学内刊行物コーナー)

図書館と私

カウンター
の内側から

大学院地域政策科学研究科
畑野 智栄

初めての図書館体験は、公民館にある市立図書館の分室だった。貸出は3冊まで。毎日江戸川乱歩を読みふけていた。内容は、もう忘れた。小学校低学年だった。中高生の頃は、図書館はほとんど利用しなかった。でもたまに行くと、なんだかワクワクした。大学生の頃は、レポートなどで必要に迫られる以外は、開架図書で目についたものだけを借りる程度だった。検索機は見よう見まねで使ってみたが、よくわからなくて「使いづらい」と頭ごなしに決めつけていた。もちろん図書館のカウンター係になんてなろうとは、微塵にも思わなかった。私には向かない職業だと思っていた。

ところが2年前、突如図書館のカウンターに座ることになった。そこからは驚きの連続。カウンター係はただ本の番号をコンピュータで読み取るだけではなかったのだ。初めて検索機の偉大さを知った。閉架書庫にあんなにもたくさんの本があることを知った。図書館内で働く多くの職員さんの存在を知った。おそれいった。知れば知るほど図書館は面白い！

カウンター係になるまでは全然知らなかった。

こんな私が2年間夜間カウンター係として、利用者と接してきた。図書館愛好家の方々から見れば、「ふてえやろう(死語か?)」かもしれない。だがこんな私だからこそ、他の図書館と比べることなくわが福大附属図書館の良さを知ることができたのかもしれない。

驚きの2年間はあっという間で、私がカウンターで利用者を待つ日々も終わりを告げようとしている。

もしこれを読んでくれたみなさんの中に、「図書館はよくわからない」とか「図書館にはあまりいったことがない」という方がいたら、是非ダメサレタと思って1ヶ月利用してみてください。そして、わからないことはどンドンカウンターに座っている職員さんに聞いてみてください。慣れれば絶対、図書館は面白い！

ほら、ダメサレタと思って…。



軽読書コーナーに“テレビ”を設置しました。

情報サービス係

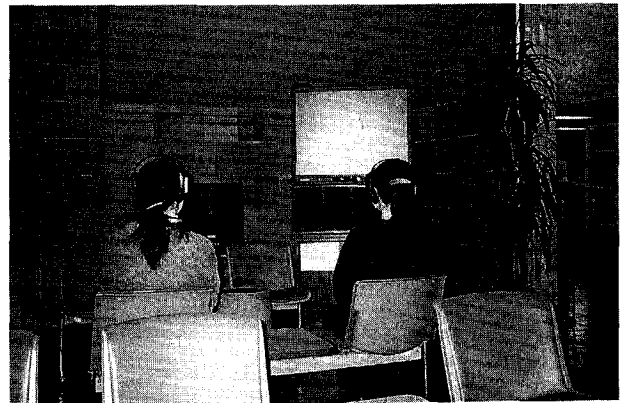
軽読書コーナーにテレビを設置しました。使用上の注意事項を守って自由に御覧ください。

操作法は以下のとおりです。

- ①主電源をONにする。
- ②音声は専用コードレスヘッドフォンを使用します。(音量はヘッドフォンで調節できます)
- ③チャンネル操作は中央操作盤で行います。

利用後は電源を切り、ヘッドフォンを元に戻して下さい。

周りに迷惑をかけないように注意して下さい。



《図書データベースの現状》 —平成11年2月末現在— (蔵書数は製本雑誌を除く) 情報管理係

	蔵書数	機械入力数	入力率
旧分館蔵書 ('75年度まで)	281,994	94,809	33.6%
統一図書館～電算化前 ('76～'87年度)	175,570	173,771	98.9%
小計 (遡及分)	457,564	268,580	58.6%
図書館業務電算化以降 ('88年度以降)	144,677	142,658	98.6%
合計	602,241	411,238	68.2%
簡略データ		15,187	2.5%

ビデオ「新・図書館の達人」(3巻)

学術情報係

第1巻 情報基地への招待 —図書館は世界へ開かれた窓—

第2巻 文献検索法の基礎 —情報の海で溺れないために—

第3巻 情報検索入門 —デジタル世界への旅立ち—

図書館は「本の倉庫」ではありません。学内の教育・研究の“心臓”である図書館はいま、新しいメディアもフル装備した、情報の一大基地に変貌しつつあります。図書館は世界へ開かれた“窓”なのです…。と、ビデオの説明資料に書いてあります。このとおり、私たちは(たった)数年前とは比較にならない程情報の渦の中に立っています。今、それらの情報をいかに上手に使いこなすか(流行り言葉で言えば「情報リテラシー」)が大変重要になっています。このビデオは、前シリーズ「図書館の達人」を全面的に改訂したもので、「情報の大海原を泳ぎ切るために」きっと役に立つ情報となることでしょう。また、ここに登場するデジタル人間はすぐ近くにも居そうです。あなたはどうか感じますか?このビデオ、一見の価値があります。

ネットワークを利用した文献複写申込みを開始しました!

学術情報係

4月よりネットワークを利用した文献複写申込みを開始しました。これは、レファレンス・カウンターにある文献複写申込書により行ってきた他大学への文献複写申込みを、メール機能を利用して行うものです。利用対象は本学の教官のみです。

利用はネットワークにつながっているパソコンから簡単にできます。WWWの図書館ホームページ「利用者サービスメニュー」の中の「複写依頼」を選び、利用者コード・パスワードを入力すると依頼内容の入力画面になります。タイトル(書名、雑誌名など)、論文タイトル、著者等の必要事項を書込み、OKボタンを押すと依頼完了です。(通常のE-mailでの受付は行っていません。)

また、このサービスを開始することに伴い幾つかの新機能も利用できます。いずれも上記の「利用者サービスメニュー」から行います。

利用できるサービス

①文献複写申込み

②予算執行状況確認

自分の図書予算の執行額が確認できます。

③各種依頼内容の確認

ネットワーク経由で申し込んだ文献複写の依頼状況がわかります。

④ユーザ登録内容の変更

パスワード、電子メールアドレス等の設定変更ができます。

利用希望者は、パスワードを交付しますので、利用申請を行ってください。詳しくは、図書館 学術情報係 (TEL:内線 2619 E-mail: gakujo@lib.fukushima-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

附属図書館開館・休館予定表

平成11年4月～平成11年9月

夜間開館停止 (開館時間 9:00～17:00)
 開館日 (開館時間 9:00～21:00)
 休日
 ●印 休館日

日	4月	5月	6月	7月	8月	9月
1	木	上	火	木	日	水
2	金	日	水	金	月	木
3	土	月 ●憲法記念日	木	土	火	金
4	日	火 ●国民の休日	金	日	水	土
5	月	水 ●こどもの日	土	月	木	日
6	火	木	日	火	金	月
7	水	金	月	水	土	火
8	木	土	火	木	日	水
9	金	日	水	金	月	木
10	土	月	木	土	火	金
11	日	火	金	日	水	土
12	月	水	土	月	木	日
13	火	木	日	火	金	月
14	水	金	月	水	土 ●臨時休館日(予定)	火
15	木	土	火	木	日	水 ●敬老の日
16	金	日	水	金	月	木
17	土	月	木	土	火	金
18	日	火	金	日	水	土
19	月	水	土	月	木	日
20	火	木	日	火 ●海の日	金	月
21	水	金	月	水	土	火
22	木	土	火	木	日	水
23	金	日	水	金	月	木 ●秋分の日
24	土	月	木	土	火	金
25	日	火	金	日	水	土
26	月	水	土	月	木	日
27	火	木	日	火	金	月
28	水	金	月	水	土	火
29	木 ●みどりの日	土	火	木	日	水
30	金	日	水	金	月	木
31		月		土	火	

※ 臨時に閉館する場合、及び開館時間を変更する場合は掲示します。

目次

- ・図書館と講義とレポートと……………黒沢高秀(1)
- ・展示資料解説ジャン・ボダン『国家論』
(1579年、リヨン) [その2] ……………岩本吉弘(2)
- ・思い出の一冊……………雨森 勇(3)
- ・モスクワ図書館事情
——1998年の体験から……………小島 定(4)
- ・学内教官著作寄贈図書を紹介
『現代地域論』……………下平尾勲(5)
『日本的経営の論点』……………飯田史彦(5)
『権力装置としてのスポーツ』……………坂上康博(5)
- ・図書館と私
—カウンターの内側から—……………畑野智栄(6)
- ・軽読書コーナーに“テレビ”を設置しました。
……………情報サービス係(6)
- ・図書館データベースの現状……………情報管理係(6)
- ・ビデオ紹介
「新・図書館の達人」(3巻)……………学術情報係(7)
- ・ネットワークを利用した文献複写申込みを
開始しました！……………学術情報係(7)
- ・附属図書館開館・休館予定表
(平成11年4月～平成11年9月)……………(8)